

不可有懈怠事、

なぜ、このように引用したかと言えば、貞享三年はちょうど祐天が檀林に出世できるかどうかという年である。その前年に檀林主の入札についてこうも規則が出されていることは、祐天が隠遁したことと全く無関係とは言にくい。鑑了が正式に台命を受け住職したのが三月二十日であり、発布後の最初の入札であった。このことと、先に引用した『実録下書』附の記述を見れば、まさにこの入札に関するトラブルが原因であったと読み取れるのである。いずれにしても祐天は、鑑了が靈山寺に出世をしたとき、言い換えれば檀林住職の入札後、隠退を決意し実行したのである。

●第五節 隠遁生活

第一項 畿内遊歴

祐天は貞享三年春、増上寺を離れ隠遁生活に入る。このときは「初一兩月在「浅茅蓮華院」
〔『実録下書』附〕、そして牛島に草庵を結び定住するのである。

牛島に庵を結ぶ前〔『略記』〕 かくは二説あるが、最初に祐天のしたこと

は京洛等の畿内の名藍の歴訪であつた。「略記」には一兩年、「実録」附には三年とあり、今後の自分の生きる道を求めるべく、あるいは広く念仏を弘通するためゆつくりと旅を楽しんだようである。

『実録下書』附の上の余白の書き込みに「京都末津加波町某之母」が「貞享三年丙寅年」に祐天の来入を聞いて十念を拝受したとの記述があり、旅に出た年は隠退したまさにその年であつたことが知られる。

残念ながら、この畿内遊歴の時代を伝える資料は皆無といつて良い。伝記に唯一伝えられるのは、祐天が奈良東大寺の大仏を参詣し、その荒廢を憂い、復興の手助けをしようと発願する話である。

師始諸方游歴之時詣于南都大佛一見三回祿年古佛廬圯毀尊像侵_{サセリ}二雨露_ヲ因慨焉_{トシク}曰
我願_レ此堂宇有_ニ再宮建_ニ之時宜_ク隨_テ力_ニ寄_テ附柱木_ヲ一矣旋還之後住_ニ于牛嶋_ニ而日書_{シテ}
弥陀名号_ヲ一与_フ他貴賤敬_ニ事_{シテ}之_ヲ供施錢貨不_レ知_ニ幾量_一也故師不_レ移_テ前操_ヲ用_テ其
資財_ヲ造_ニ立柱木_ニ數十本_一以寄_テ附_ニ之_一也是可_レ謂_ニ南都堂再宮之發起人_一

(略記)

初游方之時詣_ニ南都大佛殿_ニ一見_ニ三回祿已往年久_{シテ}而尊像侵_ニ雨露_ニ慨焉_{トシテ}發願_{シテ}曰自後
有_ニ堂宇再宮_一之時宜_ク隨_テ力_ニ加_テ其資助_ヲ一也良願不_レ違_{タカハ}旋還_ノ之後遂_ニ建_ニ大殿巨楹十

(実録下書 完)

有余株_ヲ一焉

師初_メ游化_ノ之時詣_ニ南都大佛殿_ニ見_ト回祿_イ已來年久_{シテ}而尊像侵_ニ雨露_ニ慨焉_{トシテ}發願_{シテ}曰_ク自_レ後有_ニ堂宇再營_ニ之時宜_{シト}隨_テ力加_フ其資助_ヲ也而後還_リ艸菴_ニ書_シ寫名号_ヲ以_テ寄_セ大佛勸進_所以_テ受_ク者謝施_之淨財_ヲ為_メ料遂_ニ建_テ大殿巨楹十有余株焉更_ニ應_{シテ}諸_ノ勸進_所之請_ニ而贈_ト名号_ヲ數年_ニ「割注」自_レ艸庵_ニ至_テ弘經寺住職_ニ也

〔実録清書〕完

大佛大勸進某訪_ニ艸菴_ニ師曰_ク吾有_ニ意願_ニ心寄_ニ附大楹十株_ニ云云他日師告_ニ信心道俗_ニ曰_ク吾約_レ寄_ニ附巨楹十株_ニ其願奈何果乎道俗議_ニ云師名号利益掲焉故衆人懇_ニ望_之若_シ以_テ名号_ヲ寄_ニ附勸進所_ニ令_レ受_ク者謝施淨財充_ニ巨楹料_ニ成功必矣自_レ茲贈_ニ名号_ヲ於勸進所_ニ數年而果_ニ願望_ニ也於是大勸進曰雖_ニ師願既成_ニ勸進所之繁榮者因_ニ師名号_ヲ耳無_ニ名号_ヲ則勸進難_レ成冀_ニ師思_レ焉師許諾時_ニ贈_レ之數年矣其施覺殆及_ニ三万金_ニ云

〔実録清書〕附

この南都大仏との出会いが、祐天の數多くの名号書写のきつかけとなつたことが推察されるのである。そして、請われるまま弘經寺住職時代にまで及んだことが記されている。しかし、大仏復興を勸進した公慶の『公慶上人年譜聚英』（昭和二十九年）など東大寺側の史料に祐天の名が出てこないのが残念である（大仏勸進は貞享四年四月に始まり、元禄五年三月再

建てる『浄土宗大年表』。この頃は、まだ祐天の名は行き渡ってはならず、一介の隠遁僧として関西方面では見られていたのであろう。

第二項 隠遁中の生活と事績

隠遁生活は、元禄十二年（祐天六十三歳）まで十四年間に及んだ。祐天の名を世間に知らしめたこの隠遁生活を次に追ってみた。

牛島に戻ってからの祐天の生活を伝記から拾うと次のようである。

道俗嚮暮^{シテ}遠近懐^ニ徳^ニ而來^ル蚤夜綿綿^{トシテ}不^レ絶^ヘ聖居^ラ自為^ラ都^ヲ也矣師道力確固^{トシテ}志氣不^レ撓^マ昼夜勤修拔^キ茅連茹^{タリ}且^ニ浄業之暇書^ス彌陀聖號^ヲ日^{ヒニ}千余鋪貴賤奉^ホ持服^{シテ}三膺^ヲ之^一
獲^ル利益^ヲ者不^レ可^テ勝^ス紀^一

〔略記〕

浄業孜孜^{トシテ}不^レ倦日写^ニ弥陀宝号^ヲ凡^ニ至^ス数^ニ百鋪^ニ遠近^ノ白^ク白嚮^テ風輻湊^{スル}者猶^ノ賈^ス客^ノ扉^レ
市也^ニ

〔実録清書〕完

祐天は浄業の合間にひたすら名号を書写し、その数は一日に数百から千に達したと言う。